
魔王様と暮らす日々

ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様と暮らす日々

【ZPDF】

N13210

【作者名】

ゆづや

【あらすじ】

「ぐぐぐ普通な女の子、朝倉三波が迷い込んだのは、さまざまな魔物が彷徨う魔界。そこで出会ったのは、紫の瞳がとても綺麗な、魔王様でした。 普通な女の子と魔王様の甘い物語。

プロローグ

「それをいつして、いつあると…、ほら、花の冠の完成です。」

美しい花々達が咲き誇るこの花畠で、私は座り込んで一人の男性と

一緒にいる。

シロツメグサのような花を編みこんで、花冠を作った。
それを相手の頭にそっとのせる。

紫色の瞳をきょとんとさせ、

頭の上に乗っているシロツメグサの冠に手でそっと触れた後、彼は

それは綺麗に笑った。

その笑みを見て、私は確かにこう思つたのだ。

ああ、私は今、とても幸せなのだ、と。

魔王様と暮らす日々

私は朝倉三波。

学力は普通、体力も普通、何もかも平均的なごくごく普通の中学生だ。

季節は秋。もう長袖じゃないと外を歩くのは寒いという感じの季節だ。

私は、親に勧められて受験対策のために塾に通っていた。

「はあ、寒い…。」

ふるり、と身を震わせる。

塾の帰り道、私は夜食にと公園の滑り台の上で肉まんを食べていた。
寒い夜にはあつたかい肉まんに限る。

さてと、帰るか。

はむはむ、と肉まんを頬張りながら滑り台の上から立ち上がった。
明日は早いし、早く帰って寝なきゃ。

そんな事をぼーっと考えていたせいだろ？が、

私は、滑り台の上で足を滑りせ、後ろ向きに倒れていった。

落ちる、という感覚に恐怖を抱いた。

落ちて、打ち所が悪ければ骨折してしまつかもしれない、なんて頭で考えながら

落下していく。ぎゅっと皿を握った。

しばらくして、ぱむりと音がして、誰かに抱きとめられる感覚がした。

下に人なんていたのか、という思いが頭をよぎったが、痛い思いをしなくてホッとした。

皿をぱちっと開いた。そこには

とてもきれいな紫色の瞳をした男の人気がいた。

真っ白な花の咲いた花畠に、私と彼はいた。

あ、あれ？ 私、さっきまで公園にいたはずじゃ……？

おうおうしている私を、彼は抱きかかえたままじっと見下ろしている。

私は、彼を見上げ、疑問を問いかけた。

「あ、あの、……、此処は何処ですか、？」

「此処は私の所有地だ。誰も入る事は許されない禁域だ。」

「あ、じゃあ私もいや駄目ですね、ごめんなさい。帰り道、は、どこにあるんだろう……。」

そもそも此処はどこなんだろう？

私のいた場所じゃない。勿論公園じゃない。

急に不安になつてきた。

此処はどこ？ なんで私は此処にいるの？ なんで？ なんで？
頭の中がぐるぐるして、なんだか急に泣けてきた。

ぽろぽろと涙が出てくる。

彼はそんな私を静かに見つめていた。

しばらくして、いつまでも泣いている私の顔元に、手が添えられて涙が拭われた。

私がきょとんとして顔を上げると、彼と視線があった。

「泣かないでくれ。」

低めの声は、静かに私の耳に響いた。

紫の瞳は何処までも無表情だが、心なしか少しだけ困っているような雰囲気があった。

私の事を、心配してくれる人がいる、その事に、少しだけ安心感が出てきた。

涙を「じじじ」とぬぐって、彼を安心させるように笑みを浮かべた。

驚いたように丸められた目は、少しした後、にこりと優しく微笑んでくれた。

優しそうな人で嬉しいが、私はこの後どうしよう。
少なくとも、私のいた世界じゃなさそうだ。
どうしたらしいのか分からないうが、
少なくとも私を心配してくれる人が一人でもいてくれる事が嬉しかった。

「あの、ここってどこですか、？」

「も、一度、先ほどの質問を繰り返した。
詳しく述べる場所が分かれればいいんだけど…。
彼は、無表情な顔のままそう言い切った。

「此処は、魔界の魔帝の私の城、魔城だ。」

「……………へつ？」

「瞬、頭がフリーズする。え、今何て言つた？」

「ま、魔界…？って、あの、物語に出てくる…？」

「ちゃんと人間界もある。お前は、そここの住人ではないのか？」

「は、はい、そう、ですけど…、たぶん、。」

「しかし、着てている服装が妙な物だ。何処から来た？」

「は、はい、日本からです、けど…。」

「二ホン？そんな土地は無かつたと思つが…。」

「じゃ、じゃあやつぱつ！」は異世界…？」

「やつしたらいいんだわ、私の知る場所じゃない…。

悩んでいる私に、彼は少ししてから口を開いた。

「行くあてがないのなら、私の城に来るがいい。」

「えつ……。」

「部屋等あまつていてる。人間一人増えたところで何もできないだろう。それに……、何故だか、お前は……、捨て置けない。」

……なんて優しい人だろう。知らない人にはついて言つちや駄目だと言われているが、この人にならばいい気がした。

抱きかかえられていた姿勢からおろされて、向き合つよう立つた。

身長がとても高くて、見上げないと視線が合わない。首がちょっと痛かったけど、そんな事構わなかつた。

すっと、手が差し伸べられた。
私は、ためらいながらも、その手をとつた

。

その後は、驚きの連続だった。

彼に抱きしめられたかと思うと、瞬きをした一瞬で景色が変わっていた。

そこは、洋風の、王様とか王子様とかが使うようなお部屋だった。きょとんといえば、彼はすたすたと移動してキングサイズのベッドに私を下した。

「今日から、此処がお前の部屋だ。」

えつー

「ほ、本当にいいんですか？」

「いいと誓つてこる。」

「……だれかも分からなつてよつた輩です、よ……？」

「…………欲しいと思つた。お前を。」

はい？

何を言つてゐるのか、さっぱり分からなかつた。

ただ、…………嫌じやないだとだけ。

でも、言つてる意味がよく分からぬ。

「あのつ、それつてビツコツ意味でしょ？

その時、ばん！と勢い良く扉が開かれて、声が遮られた。

「魔王様！こんなところにおいででしたか！」

魔王様？

私

ええーっと、魔王様つて、あの、ファンタジー小説に出てくる、魔王様？

きょとんとした表情で、私は彼を見た。

彼も私の視線に気づいたのだろうか、こちらを見た。

「えー…っと、魔王様、?なんです、か?」

良く分からぬから聞いてみた。

「ああ。」

と返ってきた、。…み、短い…。
えーっと、よく分からぬけど、偉い人つて事でいいのかな?

うん、きっとそうだよね、なんかあの人たちも様付けで呼んでたし、私も魔王様つてよぼつかな。

とりあえず、抱き抱えられたままのこの状態をなんとかしないと。

「えと、有難う御座いました、。もひおろしてくださつて大丈夫ですか、よ。」

そうやつて言つ。

相手はなんだかすごく残念そうな表情を浮かべている。

し、仕方ないじゃないか、！

抱きしめられたままって結構恥ずかしいんだぞ、！

他の人たちもいるし…！

そ、そんな目をしたつて駄目な物はだめなんだから、！

無言の攻防戦を繰り返していれば、彼はやがてはあ、とため息をついておろしてくれた。

おお、やつと…。素直になつてくれた、有難う！

「えー…、お取り込み中の所申し訳ありません、魔王様、この娘は…？」

眼鏡をかけた、緑色の髪をした男の人人がそう問い合わせた。
取り込み中じゃないぞ、安心していいから！

「拾つてきた。」

「うわあー……、簡潔……。いや、間違いではないのだけど。

「そんな娘をどうするつもりですか？」

うわっ、そんなこと言われたら困る。
私は、どうすればいいのだろう？

「…………。」

ほう、魔王様も黙つちゃつたじゃないか！
どうしよう、私は邪魔なのかな？

此処にござりや、ダメなのかな？

此處においてはいけない、といわれたら、やつぱり出ていくしかない。
でも、どこに行こう?
きょろきょろと視界をめぐらす私は、不意に逞しい腕に抱きしめられてしまつ。

他の誰でもない、魔王様の手によって。

えええ、！？なに！？なに？！

後ろから抱きすくめられているので、魔王様の顔は見えない。

「ま、魔王様？どうかしたんですか？」

そうやって一応問い合わせてみる。

くるりと、体を相手と向き合いつぶされた。紫の瞳と視線がぶつかる。

「逃がさない。」

一言、それだけ呴かれた。

とたん、ぞくりと背筋が震えた。

本能的に、というのにはこいつ事を言つのだろ？。

怖い、と切に思った。

ぎゅう、と強く抱かれる。壊れてしまいそうなほどに。

でも、それを居心地がよいと思つてしまつ私もどこにいて。

「二の娘は二の城に置く。いいな。」

え？

「……御意。」

え？

な、なんか話が勝手にすすんじゃつてゐみたいだけ、いいのかな？
さつきの従者？みたいな人、反対みたいだつたけど、いいのかな？
従者さんに方に視線をやつた。

ばっちらりと視線があつたのに、ふい、と俯かれ視線は外された。

な、なんだかショックだ……。

改めて魔王様の方に振り返つた。

紫色の瞳の彼は、相変わらず無表情のままだ。

でも、その表情で、ビルがなぜこじ田舎への移住だ。

「わ、私、此処にいてもここんですか？」

「ああ。」

「迷惑がなちやうかもしませんか……？」

「構わない。」

「わ、私なんかを……」

ふこてやじで、面葉を遮られた。

胸がじんわりと暖かくなつたのと同時に、とくとんと胸が跳ねたのは、きっと氣のせい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1321o/>

魔王様と暮らす日々

2011年1月4日02時53分発行